

第3節 歴史・文化（通史）

旧石器時代

人々の生活の痕跡は、^{おおうちだに}大内谷遺跡（豊岡）で見つかった後期旧石器時代（約2万年前）^{注2)}のナイフ形石器に遡ることができる。しかし、この時代の出土資料は学術的な発掘調査によらないものが多く、当時の歴史・文化を復元するには至らない。

縄文時代

約1万年前になると地球規模で温暖化が進み、海面が上昇することで豊岡盆地をはじめ広範囲に海水が入り込むようになった。これを「縄文海進」という。縄文時代前半の遺跡は、神鍋遺跡（日高）や辻遺跡（豊岡）、堂ノ上遺跡（竹野）などの山岳地帯で見つかることから、この頃には人々が定住を始め、動物の狩りやサケなどの漁をはじめ、果実の栽培や採集によって食料を得ていたと考えられる。

縄文時代の後半になると、再び気温が低下した。海面が下がると、現在の豊岡市街地から出石盆地の周辺に湿地が形成された。^{なかのたに}中谷貝塚や^{あわら}荒原貝塚（豊岡）の発掘調査では、カキなどの貝類や魚・獣骨などが出土しており、当時の食生活を偲ばせる。この頃の集落は、^{みくらおか}見蔵岡遺跡（竹野）など、低地に営まれている。

弥生時代

縄文時代晩期には稲作が行われるようになり、弥生時代（約2500～1800年前）になると、日本列島の大部分で広く普及するようになった。この頃には、弥生土器のほか、金属器も使われるようになった。鉄製工具の使用による稲作が生産力を向上させたことで、集落によっては食料に余剰が生まれた。やがて、食料や用水などをめぐり、ムラとムラとの間で争いが起こるようになると、各ムラとの間で貧富の差が現われ、身分による階層社会が生まれるきっかけとなった。

市域では、^{ださかわはら}駄坂川原遺跡（豊岡）でモミ痕のある土器が見つまっているなど、稲作を基盤とした定住集落



写真10 大内谷遺跡出土のナイフ形石器



写真11 神鍋遺跡出土の縄文土器

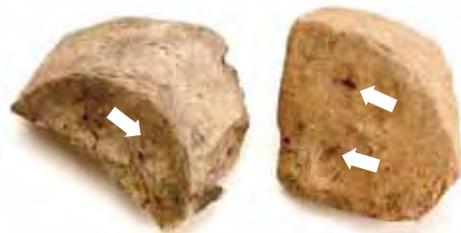


写真12 駄坂川原遺跡出土のモミ痕の付いた弥生土器



写真13 破砕された久田谷銅鐸（文化庁蔵）

注2 本項で記した時代の年代観には、異説もある。

が各地域に形成された。また、気比（豊岡）や久田谷遺跡（日高）からは銅鐸^{どうたく}が出土しており、新しい祭祀も行われるようになっていたと考えられる。

弥生時代後期になると、豊岡盆地を中心として、集落を見下ろす丘陵上に台状墓とよばれる墳墓が造られ始めた。これらには、当時は入手困難だった金属製武器やガラス製品の副葬が見られ、農業生産や円山川流域の舟運などを統率するこの地域の有力者が出現していたことをうかがわせる。なお、台状墓は丹後地方（京都府北部）と共通した墓制であり、当時の但馬は丹後とのつながりが強かったことがわかっている。中国の歴史書『魏志倭人伝』^{ぎしわじんてん}には、「今、交易が可能な国は三十国ある」と記されていて、但馬・丹後はそのうちの一つだった可能性がある。

古墳時代

古墳時代（3世紀中頃～7世紀前半）には、東北地方から九州地方までの各地に大小の古墳が造られた。特に、5世紀には「倭の五王*」が出現し、大和（奈良県）や河内（大阪府）に巨大な前方後円墳を造った。

市内では、古墳は豊岡盆地の周縁部や海岸部などに8,000基以上も造られた。森尾古墳（豊岡）は但馬でも古い古墳の一つであり、中国・三国時代の魏の年号（正始元年／西暦240年）が刻まれた青銅鏡が見ついている。見手山1号墳（豊岡）は6世紀後半に築造された前方後円墳で、全長37mを測る^{たてぬい}。楯縫古墳（日高）は7世紀前半のもので、但馬では最大級の横穴式石室をもち、大刀・金環^{きんかん}・馬具^{てつぞく}・鉄鏃^{てつぞく}・土器などが出土している。

飛鳥・奈良・平安時代

聖徳太子（厩戸王）は十七条憲法や冠位十二階を制定し、大化改新や大宝律令の制定を経て、法によって統治される国家ができた。全国は畿内と七道に分けられ、その下に現在の都道府県にあたる「国」、市町村にあたる「郡」「郷（里）」が設置された。このうち、城崎郡^{けた}・気多郡^{けた}・出石郡の全域と美含郡^{みくみ}・養父郡^{やぶ}の一部が現在の豊岡市域に当たる。

国の役所は国府と呼ばれていた。但馬国府は『日本後紀』^{にほんこうき}という当時の歴史書から、延暦23年（804）に



写真14 台状墓（豊岡・妙楽寺墳墓群）



写真15 東山墳墓群などから出土した銅鏃・鉄鏃



写真16 見手山1号墳



写真17 楯縫古墳

「^{けた}気多郡高田郷」（日高）へ移転したことがわかっている。^{にようがもり}祢布ヶ森遺跡はこの移転後の但馬国府跡であり、大型の^{ほったてばしら}掘立柱建物跡や木簡が見つかっている。

奈良時代から平安時代初め（8～9世紀頃）は疫病や災害の記録が多く残ることで知られ、正倉院に残る但馬国の収支決算書である「^{しやうぜいちょう}但馬国正税帳」には、天平9年（737）に但馬で疫病が流行した際、病人に粥や酒粕を与えたという記載がある。こうしたなか、仏教を篤く信仰した聖武天皇は、天平13年（741）には全国に国分寺・国分尼寺の建立を命じた。但馬国分寺跡（日高）もその一つであり、40年以上にわたる発掘調査が引き続き行われている。

さらに、延長5年（927）に完成した『^{えんぎしき}延喜式』によると、但馬には多くの神社（式内社*）があった。このうち、出石神社（出石）は朝鮮半島の^{しらぎ}新羅から渡来した「^{注3)}アメノヒボコ」を祀っていることで知られている。絹巻神社（豊岡）や中嶋神社（豊岡）もその歴史は古く、温泉寺（城崎）、大岡寺（日高）、松禅寺（但東）などの寺院もこの頃に相次いで創建された。

鎌倉時代・室町時代・戦国時代

平安時代末期になると、平清盛が政治の実権を握り、やがてこれに不満を持つ源氏が立ち上がった。平氏は壇ノ浦の戦いで滅亡し、源頼朝が全国に守護と地頭を置いて鎌倉幕府を開いた。

鎌倉時代の土地台帳である『^{おおたぶみ}但馬国太田文』によると、この頃の但馬では荘園制が発達し、気多神社（日高）や出石神社などの社寺が広い領地を持っていた。また、伊賀谷（^{いがだに}豊岡）や田久日・宇日（^{たくひうひ}竹野）には平家の落人が住み着いたという伝説が残されている。

また、足利尊氏は京都で幕府を開き、奈良県の吉野を拠点とした後醍醐天皇と激しく対立して南北朝時代が始まった。但馬でもこの頃には各地で合戦が行われ、山名氏が勢力を強めた。山名氏の拠点は九日市（豊岡）、次いで^{このすみやま}此隅山（出石）に置かれた。山名氏は絶大な権



写真18 祢布ヶ森遺跡出土の木簡



写真19 但馬国分寺跡 塔跡の発掘調査風景（昭和48年）



写真20 出石神社



写真21 温泉寺薬師堂

注3 アメノヒボコは、『古事記』では天之日矛、『日本書紀』では天日槍と表記が異なる。そのため、本書ではカタカナで表記する。

力を持つ大名として室町幕府の中に君臨した。最盛期には、山名氏は全国 66 か国のうち、但馬を拠点に出雲（島根県）・備後（広島県）など 11 国を支配したため「六分一衆」ともよばれていた。

しかし、応仁の乱によって幕府の権威は失われ、山名氏も滅亡へと向かうことになった。永禄 3 年（1560）、織田信長は桶狭間の戦いで今川義元を討ち取ると、天下統一へ動き出した。織田軍は生野鉦山をはじめ、此隅山城などを圧倒的な軍事力で攻め落とし、山名祐豊は堺（大阪府）に亡命した。その後、祐豊は永禄 13 年（1570）に但馬へ再入国し、有子山城に本拠を構えたが、有子山城も羽柴秀吉・秀長の猛攻を受けた。当時、山名氏の配下には「山名四天王」とよばれる垣屋・太田垣・八木・田結庄の 4 氏がおり、織田・毛利両氏のどちらに味方するか立場が分かれたが、一旦、毛利一族の吉川元春が但馬に迎え入れられた。しかし、織田勢を止めることができず、天正 8 年（1580）、羽柴秀長の攻撃で有子山城は陥落した。

江戸時代

関ヶ原の戦いで徳川家康が石田三成に勝利し、大坂夏の陣で豊臣氏が滅ぶと、天下泰平の時代が訪れた。江戸時代の市域には、豊岡藩領・出石藩領・天領（幕府が直接管理した土地）などが混在した。

出石藩は一国一城令のもとで維持された出石城を本拠に、5 万 8,000 石を誇った。藩主には小出氏の後、松平氏、仙石氏が就く。しかし、天保 6 年（1835）に「仙石騒動」とよばれるお家騒動が起きたため、仙石氏の所領は 3 万石に減らされた。この間、江戸時代初めには山名氏ゆかりの宗鏡寺が沢庵和尚により再興された。仙石政辰（1723～1779）の時代には藩校「弘道館」へとつながる「学問所」が設けられた。城を中心とした碁盤目状の整然とした区割りの町並みが整備され、庶民の営みも活況を呈した。出石川の水運を利用して物資の往来も盛んに行われ、川沿いには船着き場があった。

豊岡藩主には杉原氏が就き、3 万 3,000 石を有した。しかし、杉原氏は承応 2 年（1653）に断絶し、豊岡城も廃された。豊岡は一旦、天領となった後、寛文 8 年



写真 22 此隅山城跡



写真 23 有子山城本丸の石垣



写真 24 有子山城跡と出石城跡



写真 25 出石城跡

(1668)に京極氏が藩主に就き、享保12年(1727)には石高が1万5,000石となった。当時の円山川は大きく蛇行して流れ、南の玄関口である京口(豊岡市城南町)から舟で出入りしていた。そのため、京口から小田井神社にかけての円山川沿いには、商工業者や寺院などからなる町並みが形成された。豊岡藩の陣屋*は、神武山の北側(現市立図書館)に置かれ、その南西には元禄13年(1700)頃、但馬最大の規模を誇る興国寺が建立された。また、天保4年(1833)には藩校「稽古堂」が創設された。

日本海や円山川の舟運は、両藩の繁栄に不可欠なものだった。竹野地域の海岸部は「風待ち港*」として知られ、北前船の往来で栄えた。また、竹野地域の各地区では小規模ながら多くの船主が生まれ、北前船での交易で財を得た。円山川は、北前船と豊岡・出石を結ぶ中継路として機能し、多くの川船が行き来していた。川沿いの小田井町や城南町(豊岡)、江原(日高)などには船着き場が設けられ、多くの人々で賑わった。

陸上交通も、多くの文物が行き交っていた。江戸時代には京都と豊岡・出石を結ぶ京街道*が整備され、大名の参勤交代にも利用された。但東地域には丹波へ抜ける山越えの道(登尾峠のぼりお)が開かれ、宿場町や関所が設けられた。また、街道沿いには道標や石仏がいくつも造られ、旅人の往来を助けていた。

城崎温泉は、江戸時代の医家香川修庵しゅうあんが、師(後藤良山こんざん)の遺志を継いで著した『一本堂薬選』の中で「天下第一」と称したことをきっかけに、その名声は全国に広まった。江戸時代には現在のような自由な旅は許されていなかったが、城崎温泉とうじへは湯治を目的に、京都や大坂などから多くの参詣者が訪れた。客の増加により、現在のガイドブックにあたる『但州湯島道中 独案内ひとり』や、旅行記『但馬湯嶋道之記』のほか、「城崎温泉寺之図」なども刊行された。

交通の発達による物流体制の整備や藩の奨励によって、各地で現金収入につながる産業も起こった。豊岡地域の柳行李生産やなぎごうりは、原料となるコリヤナギを円山川沿いの湿地で栽培するとともに江戸でも市場を開拓し、大きなシェアを占めた。また、出石地域では寛政



写真26 「豊岡城下図」(部分)



写真27 円山川をゆく川船(明治時代)



写真28 久畑(但東)の旧街道



写真29 「城崎温泉寺之図」(部分)

年間（1789～1801）、良質な陶石^{とうせき}が発見されたことにより、出石焼の本格的な生産が始まった。出石焼は、舟運を利用して山陰や北陸にも販路を広げていった。

但東地域では、19世紀初めに丹後から縮緬^{ちりめん}産業が伝えられ、自給自足が基本だった生活の副業として山村の発展を支えるようになった。

黒船が来航した幕末には、但馬でも「生野の変^{*}」が起こった。鳥羽・伏見の戦いで新政府軍が幕府軍に勝利すると、豊岡藩と出石藩はこれに協力して版籍奉還を行い、明治時代が始まった。

明治時代以降

明治4年（1871）の廃藩置県により、豊岡・出石の両藩は解体され、豊岡県が誕生した。豊岡県は、但馬・丹後・丹波（現京都府福知山市・宮津市・舞鶴市、兵庫県丹波市・篠山市など）を含み、人口約50万人の広範囲を管轄した。豊岡地域には、江戸時代の陣屋跡（現市立図書館）に県庁が置かれたほか、公共施設や金融機関などが相次いで建てられ、北近畿の中心地として栄えた。明治9年（1876）にはさらに行政機構の再編がなされ、豊岡県は兵庫県となったが、兵庫県豊岡支庁が引き続き豊岡地域に置かれた。

江戸時代において但馬の中心地だった出石地域は、明治9年（1876）に起こった大火で壊滅的な被害を受けた。しかし、出石焼や製糸産業などにより復興し、江戸時代の町並みを継承した再建が進められた。明治20年（1887）には和洋折衷が特徴的な出石郡役所（現明治館）、明治34年（1901）には芝居小屋「永楽館」が建てられ、賑わいを見せるようになった。

基盤施設の整備も進んだ。明治14年（1881）には豊岡地域で電報が利用できるようになった。電話も明治41年（1908）に豊岡地域で、その翌年には出石地域でも利用可能になった。電気は明治40年（1907）に城崎地域で供給が始まった後、豊岡・出石地域などでも普及した。上水道は大正4年（1915）に豊岡地域に設置され、周辺の農村部へ拡大していった。

鉄道も近代化に大きな役割を果たした。山陰本線は明治42年（1909）に城崎駅（現城崎温泉駅）まで、明治45年（1912）には出雲今市駅（現出雲市駅）ま



写真30 出石焼最古の窯、桜尾窯



写真31 「豊岡県図」(部分)



写真32 明治時代の出石(『但馬商工便覧』)



写真33 復原された永楽館

でが開通すると、鉄道が輸送の主役となった。城崎では温泉街を訪れる観光客が急増し、多くの文人・墨客も訪れた。志賀直哉もその一人で、大正2年（1913）に外傷の療養のため城崎温泉を訪れ、そこでの体験を小説『城の崎にて』を著した。

大正時代には、豊岡地域で円山川改修工事や上水道整備などを柱とした「大豊岡構想」が進展し、^{ことぶき}寿ロータリーを中心とした都市計画も進められた。

こうしたなか、大正14年（1925）5月23日、円山川河口付近を震源とするマグニチュード6.8の地震が発生した（北但大震災）。震源に近い豊岡地域や城崎地域では大規模な火災に見舞われた。復興にあたり、豊岡市街地では防火帯として鉄筋コンクリート造の建物が多く建てられた一方、城崎温泉街では、防火壁など火災に対する備えを施しながら、木造建築を主体とする温泉街の雰囲気維持した復興がなされた。

震災復興と時を同じくして、近代スポーツによるスキー観光の開発が始まった。神鍋高原では、大正12年（1923）にスキー場が開業し、京阪神から多くのスキー客が神鍋高原を訪れるようになった。さらに、太平洋戦争ののち、昭和32年（1957）には神鍋高原が国民体育大会冬季大会のスキー会場となり、レクリエーション施設が地域経済の一翼を担うようになった。

内陸部では、繊維産業や鉱山開発、養蚕も盛んだった。日高地域では、明治時代後半には製糸工場が稼働しており、但東地域では、工場の機械化等によって縮緬ちりめんがより発展した。竹野鉱山（竹野）では昭和14年（1939）に精錬所も設けられて活況を呈した。鉱山が閉じられると、離職した兼業農家によって但馬牛の飼育戸数が増加し、品質の高い子牛を生産した。これに対し、海岸部では昭和に入ってから漁業の近代化が進んだ。動力船の導入により、漁場が広がったため、水揚げ量・漁獲高とも増加の一途をたどった。

それぞれの地域の特徴を活かして発展してきた豊岡市、城崎町、竹野町、日高町、出石町、但東町は、平成17年（2005）4月1日に合併し、新しい豊岡市が発足した。



写真34 開業直後の城崎駅



写真35 地震で倒壊した建物（豊岡駅付近）



写真36 昭和初期の神鍋山スキー場



写真37 昭和初期の津居山港

第4節 組織・施設・施策

(1) 組織・施設

文化財行政

本市の文化財行政は主に「教育委員会教育総務課」が担っている。かつて、文化財担当部署は、「文化振興課文化財係」が全体の調整を行いつつ、「豊岡市立出土文化財管理センター」（現在は廃止）が埋蔵文化財と史料整理の実務、「但馬国府・国分寺館」が展示・普及活動、「いずし古代学習館」が体験事業と、各施設が特色を活かして文化財の保護と活用に努めていた。

平成 27 年（2015）4 月、文化財行政を一体的に推進するために組織改編を行い、文化財係と豊岡市立出土文化財管理センターの業務を統合して「教育総務課文化財室」ができた。さらに、「但馬国府・国分寺館」は「豊岡市立歴史博物館－但馬国府・国分寺館－」（以下、歴史博物館とする）と名前を変え、市全域の歴史を網羅する総合歴史博物館となり、文化財室職員が博物館職員を兼務することとなった。

なお、出石伝統的建造物群保存地区の関連業務は「出石振興局」が、天然記念物のうちコウノトリに関する業務は「コウノトリ共生課」が、玄武洞に関する業務は「大交流課」が担っている。

歴史・文化に関連する施設

歴史博物館以外の教育文化施設には、「豊岡市立美術館－伊藤清永記念館－」（文化振興課）、「日本・モンゴル民族博物館」（文化振興課）、「植村直己冒険館」（生涯学習課）があり、「日本・モンゴル民族博物館」では、但東地域の民俗資料を展示している。また、「コウノトリ文化館」（コウノトリ共生課）では、本市の自然や文化に関する展示が充実している。さらに、各地域の歴史資料を展示する施設には、「北前館」・「住吉屋歴史資料館」（竹野地域）、「出石史料館」・「出石明治館」・「出石家老屋敷」（出石地域）がある。

さらに民間の施設でも、「城崎美術館」（城崎地域の出土考古資料などを展示）や「城崎麦わら細工伝承館」、「玄武洞ミュージアム」（玄武洞や豊岡の地質などを展示）などがあり、それぞれの特徴を活かした活動を展開している。

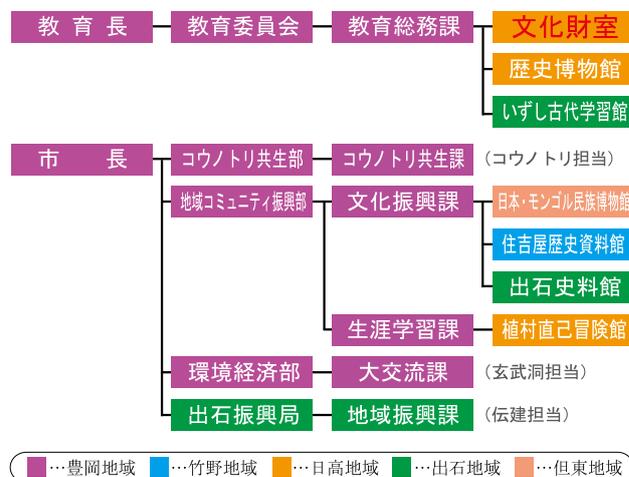


図 10 豊岡市の文化財関連部署・主要施設



写真 38 豊岡市立歴史博物館
－但馬国府・国分寺館－

(2) 関連計画

教育総務課文化財室の関連計画

本市では、文化財保護法の下、豊岡市文化財保護に関する条例を制定して各種施策を実施している。これらの法令に基づき、文化財の保護・活用に関して、次の3つの計画を策定している。

① 但馬国分寺跡保存管理計画・整備基本計画

「古^{いにしえ}の但馬が今によみがえるー地域の誇りとしての但馬国分寺跡ー」を基本理念とし、歴史・文化を体感できる憩いの場の創出や、交流人口の拡大をはかった地域づくりへの展開などを目指す。

② 山名氏城跡整備基本計画

市民にとっては郷土の誇りであると同時に憩いの場として、見学者にとっては山名氏の歴史と「山城」の雰囲気^{いづれ}を体感・体験できる場として保全管理し、「肌で感じる山名氏城跡」を目指す。

③ 出石伝統的建造物群保存地区保存計画

城下町固有の景観を、地区内の住民及び市民共有の財産として保存し、交流や情報発信を通じてまちづくりに活用することにより、生活環境の向上と文化環境の発展に資することを目的とする。

その他の関連計画

歴史文化自然遺産は、まち・自然・住民と一体のものとして存在する。周辺環境については、文化財室以外でも、それぞれに応じた計画が展開されている。これらの計画と連携することで、歴史文化基本構想はより高い効果を得ることができる。

表1 文化財行政以外の主要関連計画

名 称	目 的	担 当 課
豊岡市景観計画	本市における景観の保全形成と、魅力の向上を目的とする。市・市民および事業者が、協働で豊岡らしい景観を守り、磨きをかけて、将来にわたって良好な景観の保全形成を図り、豊かな地域環境と地域特性を活かした活力ある豊岡を実現することを柱とする。	都市整備課
豊岡市環境基本計画	先人から受け継いだふるさとの自然や歴史・文化を保存・再生・創造できるよう、取り組みの基本的な考えと手法を示す。環境という概念を幅広く捉え、生活や経済活動など、すべての行動が環境を良くすることにつながることを目指す。	エコバレー推進課
豊岡市環境経済戦略	本市において環境と経済が共鳴したまちづくりを目指す。地産地消の推進、「コウノトリツーリズム」の展開、自然エネルギーの利用などを柱とする。	エコバレー推進課
豊岡市生物多様性地域戦略	本市において自然環境・文化環境の保全・再生・創造を推進することを目的とする。「地域の強化」と「生物多様性の保全」を共鳴させることを柱とする。	コウノトリ共生課
山陰海岸ジオパーク保護保全管理計画	山陰海岸ジオパークの貴重な地域資源を、適切かつ継続的に保護・保全し、持続可能な価値で利用することを目指す。	山陰海岸ジオパーク推進協議会事務局 (兵庫県但馬県民局)